

## Y2-25

### 自然エネルギーを用いた災害救援蓄電システムの開発について

熊本赤十字病院 臨床工学課<sup>1)</sup>、  
熊本赤十字病院 国際医療救援部<sup>2)</sup>

○黒田 彰紀<sup>1)</sup>、村上 智章<sup>1)</sup>、曾篠 恭裕<sup>2)</sup>、宮田 昭<sup>2)</sup>、  
鈴木 隆雄<sup>2)</sup>

熊本赤十字病院は、救援活動における電力確保の問題を解決すべく、平成23年から、九州電力(株)技術本部総合研究所が開発したりチウムイオン式蓄電池の救援現場での活用について同研究所と研究を続けてきた。その結果、太陽光を用いた蓄電池の充電システムを用いた救援活動が実用段階に入ってきた。今後、同システムを、災害時のみならず、平時の医療活動においても活用する方向で研究を続けていきたい。

## Y2-26

### 支部・施設合同救護員主事対象研修体系の構築

日本赤十字社香川県支部 事業推進課

○大林 武彦<sup>おおほやし たけひこ</sup>

【はじめに】災害救護活動は日本赤十字社の最も重要な業務の1つである。当支部は国内型緊急対応ユニット(dERU)を保有しており、全国で3番目に配備がなされている。また、当支部管下高松赤十字病院は災害拠点病院でもある。災害救護活動をいかに展開し、業務を遂行するためには、主事の役割は非常に重要となる。したがって主事(職員)に対する救護活動への意識付けや技術を習得させるためには、あらゆる場面で教育・研修・訓練等が必須であると思慮する。そこで平成21年度から、それまでの救護員養成研修や訓練等に加えて主事対象の研修体系を構築して救護業務の推進に資することに決定した。

【目的】赤十字救護員主事として任命された者が、災害救護活動についての理解を深め、特に救護班における主事としての自己の役割や責任を明確に自覚するとともに、災害救護に必要な基礎的知識や技術を習得することを目的とする。

【方法】主事対象研修を3回シリーズとして構築した。1日目BP(基礎編:ブロンズプラクティス)。2日目SP(応用編:シルバープラクティス)。3日目GP(特別編:ゴールドプラクティス)として実施した。内容として、1日目BPは赤十字救護員主事としての任務と役割について、非常食の炊出し、救護所の設営、応急手当等。2日目SPは救急車及び通信指令車取扱い、発電機の取扱い、ロープワーク等。3日目GPは国内型緊急対応ユニット(dERU)取扱い、投光器取扱い等である。

【結果】3年間実施した結果、繰り返し研修をすることで習得することが再確認出来た。指導する立場としてはマンネリ化している錯覚を覚えるが、受講される立場としては久しぶり手にする資機材に翻弄される。この研修は確な効果があり、昨年3月に発生した東日本大震災に派遣された救護員は過酷な状況下で被災者を救うために全力を尽くしてくれた。

## Y2-27

### 被災地へのチーム医療の提供を目指した災害教育の充実を

武蔵野赤十字病院 救命救急センター<sup>1)</sup>、  
救命救急センター看護部<sup>2)</sup>、薬剤部<sup>3)</sup>、医療社会事業部<sup>4)</sup>、  
防災・広域災害委員会<sup>5)</sup>

○勝見 敦<sup>かつみ あつし</sup><sup>1),5)</sup>、須崎紳一郎<sup>1)</sup>、原田 尚重<sup>1),5)</sup>、  
原 俊輔<sup>1)</sup>、蕪木 友則<sup>1),5)</sup>、安田 英人<sup>1)</sup>、  
片岡 惇<sup>1)</sup>、櫻井 美枝<sup>2),5)</sup>、原田 真理<sup>3)</sup>、  
細谷龍一郎<sup>3)</sup>、高桑 大介<sup>5)</sup>、小野 耕治<sup>4),5)</sup>

東日本大震災では日赤は全国赤十字病院より896班の医療救護班を派遣され被災地各地で活動した。医療救護活動において混乱する災害の現場で、薬剤管理、服薬指導、調剤など薬剤師の役割の重要性が再認識されたところである。救護班896班中、488班(54.5%)に薬剤師が救護班員として活動している。当院派遣救護班においても16班中13班に薬剤師が同行した。災害救援が長期化するような大規模災害において、被災地に求められているのは、地域医療システムの立て直しである。そのためには、医師、看護師、ロジステック(調整員)で構成される救護班という単位だけではなく、薬剤師、放射線技師、ME、検査技師、理学療法士、社会福祉士などを含めたチーム医療としての提供が大切である。これらの医療救護を円滑にするには、医師会、行政、保健師、薬剤師会などの地域医療関係者との調整するコーディネートも求められる。また、日赤は研修医への災害教育も重要である。東日本大震災においては救護班896班中201班に研修医が同行しており、災害医療は研修医時代に、身に付けておくべき医療のひとつになっている。当院では平成16年新潟県中越地震以降、救護班に研修医を配属している。日赤は、平成21年から超急性期に活動する救護班のレベルアップを目的とした全国救護班研修(日赤DMAT研修会)を開催しているが、病院レベルにおいても、被災地への医療支援能力を向上を目指した災害医療に通じた人材育成のための教育、研修の強化が重要であると考えている。

## Y2-28

### 災害時の出動準備シミュレーション研修を実施して

長浜赤十字病院 医療社会事業部社会課

○大橋 直美、中村 誠昌、金澤 豊、田川 有美<sup>おおはし なおみ</sup>

【はじめに】実際に医師や看護師を災害現場へと派遣する機会は少なく、災害が発生した場合に備えて出動を想定して災害対策本部の立ち上げ、派遣救護班に資機材の積み込み作業を行う研修は少ない。その為、出動のための経験を積むことは困難である。今回、中央防災会議の通達に基づき、実践的な救護班出動研修を実施したので報告する。

【研修概要】遠隔地災害時におけるN病院の救護班出動準備シミュレーション研修を実証した。N病院は近隣県の地震災害に対して院内に災害モード宣言を行い、災害対策本部の設置と救護班要員の決定、救護班支援を実施し、災害時の対応について職員より出動時の課題や問題点を抽出した。

【用語の定義】出動準備とは、派遣元の病院が災害対策本部を設置し、初動救護班が災害派遣の為に必要な服装、装備を準備することとする。

【方法】参加者への質問紙法

【対 象】・災害発生時の参集職員34名、アンケート回収率61.76%

【結 果】・参加した職員は、全員が今回の研修について「役だった」「出動までの流れが理解できた」と回答した。緊急時の応援態勢、指揮命令系統について「理解が出来た・すこしわかった」は約9割であった。

【結語】今回の出動シミュレーション研修を通して、病院の救護班要員に対する初動の際には資機材の配置場所周知と普段からの出動準備訓練が必要である。今後、定期的に研修を行いより実践につながるようにスキルアップするために、職員に対する初動体制整備、マニュアルの作成、日頃の災害救護研修への参加促進等への取り組みを行いたい。